

田魯庵全集

9

小説 I

ゆまに書房

内田魯庵全集 第九卷

五二〇〇円

昭和六十年二月二十五日 初版

著 者 内 田 魯 庵

編 者 野 村 喬

発行者 荒 井 秀 夫

印刷所 第二整版印刷所

製本所 (株)常 川 製 本

発行所 ゆまに書房

東京都千代田区内神田一―五―十一セントラル大手町

電話 (二九二)〇七九八

振替 東京四―六三一六〇

内田魯庵全集第九卷／小説Ⅰ・目次

くれの廿八日	五
破島臺	一〇三
今様厭世男	一三一
湯女	一五九
老車夫	一八一
うきまくら	二〇七
あたらよ	二七九
かた鶉	三〇七
落紅	三七五
霜くづれ	四二一
血ざくら	四八三
解題	五四七
解説	五五五

小說
I

く
れ
の
廿
八
日

くれの廿八日

其 一

歳暮くれの二十八日だといふに、

こゝらに隠れもない揚土門あげつちもんの金満家では來陽はるの準備しただくが猶だ出來ずにある。煤掃も障子の張替も畳の表換も庭の掃除も盆栽の手入も何一つ出來ぬさうだし、旦那様は苦い顔をして奥様はツンケンしてござる、奉公人は佛頂面ぶつどうめんする、飼犬は嚙付く様に吠える、出入の商人あきんどは竊々と來て竊々と歸る、偶さかの來客も冷へた茶一杯で追返され、座敷も庖厨だうども寂寞閑ひっそりかんとして八十何坪のだゞッ廣い家が恰まるで火の消えた様である。

元來いうたいは華奢好きの奥様天下で、年末は格別に人出入繁く、奉公人を初め出入の絆纏着、牛乳配達、新聞配達の末まで歳暮の氣前けぜんを見せ、世間は越すの越されぬのと遺線に忙がしい中で、此家ばかりは追羽子の春めいた音を牆越かきに往來ゆきの人に聞かしたのが、之はまた么麼どうもうしたものか、例も二十五日拂ひが定例きまりの勘定すら押迫おしづつて猶だ下さがらない始末で、出入の者が例に由て鹽鮭しほや砂糖袋を持込んでヒョコ／＼頭を下げて揉手

をしても、奉公人の脹れた面に算勘を狂はして悄然と歸る。何でも尋常事でない、寄ると觸ると此話題で持切つてゐたが——中働きが迂濶り口走つたを漏聞くと、夫れも其筈で、

やがて一ト月前に奥様が泣聲を慄はして旦那様と大論判をしたさうだ。それから媒妁人が朝に晩に出入をする、本家から煩さく手紙が来る、旦那様は二階の書齋に閉籠つた切で脊戸の鶏舎でくつくと餌を求める秘藏のハンバーグをも飼殺しの久助爺さんに任して了ひ、奥様は離れのお部屋を閉切つて自慢の榮左衛門の音締をペンともさせないで一切の家事を仲働きの銀が詮事なしに取仕切つてゐるまゝに打棄つて置いた。でもなく他人同士が下宿してゐる様なもんで、顔を見合はしても緘黙と口を交かずにゐた。

此二三日、奥様のお吉は病氣だと云つて離室の蓐に就き、甲走つた聲が例もよりは激しく奉公人の肝を冷ざした。旦那様の純之助は朝から出掛けて深更けて歸ると、苦い顔をして、深い溜息を吐いて書卓の前に根が生へた様に固くシヤチロバツて一二時間考へ草臥れて蓐に入つてからも反側ばかりしてゐた。

昨日は午後から媒妁人の藁橋番兵衛、湯島で梶善と少しは人に知られた袋物屋の主人が来て、半日密々と二階で純之助と相談した後、一緒に何處へか出掛けて、其晩深更けてから純之助だけが一人で歸つて來た。平生も酒を飲まない人が不思議に赤い顔をして、不思議な足拍子で階子を躍上つて、不思議な唄を不思議な節で唄つて、舉句に草臥れてグツタリと蓐に倒れた時は欠伸交りに不思議な溜息を洩した。斯ういふ容子を見たのは奉公人も初めてださうで。

其翌る日が即ち二十八日で——

二番鶏が啼くと間もなく、薄暗い中から雨戸を勢ひよくガラ／＼開け、珍らしく最愛のブルドッグを伴れて朝寒を侵して散歩に出掛け、歸ると又珍らしくハンバークに自身と餌を與つて珍らしく茶の間で朝食を濟まし、珍らしく小間使ひの濱を擲擲つて高聲に笑ひ、珍らしく庖厨へ來て久助爺さんに無益口を叩き、珍らしく中働きの銀に二階の掃除を命令け、珍らしく庭下駄を引摺つて離室の椽からツイ四五尺を離れた鐘乳石の傍でブルドッグを擲擲ひながら乾蒸餅を與つた。

で、竊と障子の硝子越に離室を覗くと、お吉は良人の牙えた聲が珍らしく庭先で聞えるを知らぬ振して後向きのまゝ咳きさへもしなかつた。が、眞實睡てゐるとは請取れぬ容子で、此容子を見た純之助は暫らく躊躇つたが么麼やら面白からぬ顔して再び平日の様に二階の書齋に引込んで了つた。

『日月籠中の鳥、乾坤水上の萍、』と高らかに古詩を吟じて後ろざまに投出す様に熊熊の皮を敷いた簾の寢臺椅子に倒れ、眩しさうな眼を半分閉ぎ小鼻に皺を寄せて何處となく睨んだ。

純之助は三十三で、中脊の肥満した、眼付の鋭い口元の緊つた、肩幅の廣い、何方かといふと嚴格い方で、揉上から頤へ掛けて疎らな髯の生へたのが一層男振を一ト癖有り氣に見せた。

莫大小の襯衣を二三枚着た上にフネルの單衣と黒ッぱい銘仙の綿入とを重ね薩摩の蚊紵の綿入羽織を引掛け、鼠色に化けた白縮緬の帶を縄の様にしごいて締めた風采は、何處やらに品格があつても一級所得税を納める區内の金満家らしくは見えないで、

『小糠三合——往時からの相場だ、』と口裡で呟いて喟然として歎息した。

聽^{やが}て椅子を離れて、十畳から次の六畳へと殆んど機械的に直角を作つて運動し初めた。恰度疲勞した兵士が士官の號令に餘儀なく進行する様に姿勢も歩武^{ちしなみ}も力が抜けてゐた。

二階は二室^{ふたまた}だけで、二室とも書齋らしく奇麗に整理つて、法隆寺摸様の段通^{わんづか}を一杯に敷詰め、心越禪師の扁額^{なげし}を楣間^{なげし}に掲げ、抱一上人が源氏繪扇面散らしの金屏風を片隅に建て、顏輝が錦欄表装^{じみたて}の大幅唐物古銅の獅子の香爐、柿右衛門が錦染の花瓶^{はなびけ}、寛齋が蒔繪の手匣など、先代が好事家だけに何れも由緒ある有川家自慢の逸品を床、違棚に飾立てた中に、表紙の手摺れた洋書、報告書めいた假綴物、四五本残つた葉卷^{はなまき}の箱、封口^{くち}を開けた葡萄酒^{ぶらう}の瓶、古新聞で包んだ農産物、薦繩^{かち}掲げの標本を塵埃と一緒に埒もなく散逸し。折角好事家が忝けなさに淚覆して勿躰なぐる名物を可惜見榮もなくがらくたの中に埋めてゐた。

で、風雅でもない男が、昨夜酒氣に乗じて江戸川半切の繼^ついだのに、「和順齊^{わじゆんはいへ}家之本^{をとも}、循^り理保^{にしたがふ}家之本^{をとも}」と拙劣い我流の毫^{ふで}を墨黒々と揮つて其下に告朔餼羊坊と落款^{ちくかん}したのを、和洋の書籍をギツシリ詰込んだ大形の西洋書架の上に張付けたのが部屋の中で何よりも一番目に着いた。

一巡隅から隅を運動して壁上に掛けた墨西哥^{メキシコ}及び中部亞米利加^{アメリカ}の圖の前まで來ると、轟然^{すつく}と佇立まつて苦い顔が次第に和いで來たまで見蕩れてゐた。

『南太平洋鐵道を下つて……』と指頭で、地圖を搜つて獨語ちた。『國境エルパソを通過ぎてチワワ……』

チワワ——渺茫^{べうぼう}たる原野に僅々數年の間に五萬の小都を作り出した、殆んど蜃氣樓を欺く奇蹟で、州知

事のアウマダと革命の元勳テラザスとは永く歴史に傳はるべき名だ。爰にはまた墨西哥の華盛頓と云はるゝエズイト宗のイダルゴ上人が血を流した遺蹟が今でも行人の征衣を濕ほす哀れを留めてゐるのだ。此チワワを南下する更に三四百哩、ザカテカス市は西半球の最大著名の地で、コロンプスの大陸發見後、爰で初めて銀山が發見せられ、恰度今のクロンダイクの騷動の様に投機熱が遽に勃興して、北米大陸で初めての百萬兩富限が一夜の中に首を持上げ、北米大陸で初めての新銀貨が燦々光り出したのだ。今から三百年前で、此發見隊の一番傑い奴がクリストバル、デ、オニヤーテといふ大膽不敵の冒險者だ。此奴の小倅が其上手を行く無敵な豪傑で、コルテズ將軍の孫女を女房にして同氣相求むる剛腸石心の鐵脚隊を組成つてネブラスカからカリフォルニア灣まで探檢した奴だ。今の合衆國の西南三分一は即ち此オニヤーテ父子が勁勇無双の鐵腕で創建したので……

『クリストバル、デ、オニヤーテ——豪傑だナア、』と思はず力癌を入れて慷慨した。『野豬の勇、野豬の勇……かも知れぬが豪傑だ。黄金に渴する奴、酒肉に飽く奴、美人に溺るゝ奴……』

……如斯な下劣の匹夫に何が出来る？ オニヤーテが九牛一毛ほどの仕事も恐らく難かしからう。獵官だの、賣收だの、政綱だのマニフエストだの外資輸入だの増税だの軍備緊肅だのと騷立てるが、トバの結局は弗箱一杯の金子を貯めて色の全白い奴を四五人も飼殺しにしたいばかりの國利民福論で自分等が酒が飲みたさに祭禮騒をする町内の若者と何邊に相違がある。策士と金看板打つた大政事家が何をした？ 高價で政黨を賣附けて機密費に煖たまる駈引が精一杯で眞向に殖産興業を振翳して國益の急先鋒と稱する大

實業家が何をした？ 不相應な配當に株の相場を狂はして手拭紙にもならぬ株券を賣飛ばす魂膽が満身の

智恵袋だ。惣じて一國を擧げて利奔名走に勞らされ、蝶鳥の花に酔ふて夕風の葉越に來るを知らぬ間に濠

ストラリヤ

洲は獨立の歩を進め、南米諸國は次第に文明を競ひ、墨國太平洋鐵道は瓦地馬拉國境まで聯絡し、尼加拉

ワ

瓦運河は疎通し、巴拿馬の開鑿は、竣功し、太平洋と大西洋は俄に近接し、キャリビアン海が海上鈞勢の

中心となり、中部亞米利加が東印度の繁昌を來し、布哇群島が東西二球の樞軸となり、太平洋が世界の檣

舞臺となるのだ。十八世紀に勃興した南歐の遠征熱革命の聲に銷沈して歐羅巴が内争に惱まざるゝ事凡そ

百年、人種の膨脹と社會の逼迫とで必要上再燃した殖民の競争が漸く激烈となるは既に數年に差迫つた二

十世紀で、我々が未來の太平洋問題に處して平和の鑰を把持する盟主となるには北緯三十度以南の太平洋

一帯の地に雄鎮を築くが第一の準備である。我々はヒコーマニチイを宣傳し、能ふべくんば世界の軍備を

撤回するを庶幾するが故に歷史上必然避くべからざる人種の衝突を救はんが爲め縱令卵殻を以て巖石を碎

くより難くとも此風雲に際會して平和の福音を傳へんとするので、恰もノアが天の未だ霖雨せざるに先だ

ち明命を畏みて方舟を建造したと全じ心持で、此獸慾的競争の高調に乗じて無人の樂郷に新ユトープヤを

創開かんとするのである。即ち此無人の樂郷は……

『墨西哥……墨西哥、』と猛然として腕を叩いて慷慨した。

サンチアコの沿岸に牛馬を放つも面白し、チワワの深山窮谷を探つて鐵椎を奮ふも面白し、アルメリヤ

の北岸に日本式の稻田を拓くも面白し、シナロアの森林に堅材を伐出すも面白し、ソコヌスコの耕區に珈

俳園はいえんを開くも面白し——と歴々地圖を案じて餘念もなく其處此處と辿て行く中、端なくも三百年前支倉六郎左衛門が上陸したアカプルコに指頭が留ツた。

『アカプルコ——我々の耳には郷里の様に響く、』と口裡で云つて莞爾と微笑した。で又、憶出した様に、『墨西哥……墨西哥』と連呼して滿身に力を籠め、肩を怒らし、肱を張つて、唯ツた五尺三寸の男が仁王の搖ぎ出す如き身振で大跨に二タ足三足歩き出した。

が忽ち又、力の抜けた様に滿身の筋肉が緩み、燦ついた眼が光彩を喪くして蹶々たふさと以前の籐椅子に倒れ、暫らく眼を閉ぢて沈吟してゐた。聽てちよちよツと舌鼓して無理やりに突起ち、力の無い聲で前と同じ古句を口吟くちんさんだ。『日月籠中の鳥、乾坤水上の萍……』

處へ襖がすすウツと開き、中働きの銀が敷居越に手を突いて『お客様、』と案内した。同時に顔を出したは、二十一二の高尙な束髮姿で微塵も白粉氣なく凜乎きりふとした風采は少と俅きやんらしいが、色白のぼぼツとりした豊下しもづくれの愛嬌ある容貌おもてざしで、

『珍らしいツ、』と純之助の淋しい顔は俄に春めいて來た。

『ツイ忙いそがしいので、』と嫣然笑ひながら黒の斜綾はすあやの吾妻コートを脱いだ。『クリスマスを濟まして漸やうと樂になつた』

質朴な唐糸の上着に小紋を捺いた支那縮緬ちりめんを重ね、黒斜子なまこの被布を着た野暮くたい服裝で、チヨイと衣紋を直しながら銀が薦めた紙布織の座蒲團に遠慮もなく座つて、光淋が描畫をした桐胴の火鉢に摺寄つて

寶石入と槌目の指環を穿めた眞白き手を惜氣もなく火に翳した。

『寒い、』と火鉢を中央に相對ひに座つた純之助を見上げて、『寒い……雪が降りさうだ。』

『忙がしかつたの、』と純之助は壞手をして貧乏揺りをしつゝ、『二ヶ月ばかり見えんかつた。』

『忙がしかつたの何のツて。』と火鉢に翳した手を揉みながら、『學期の試験をした上に、受持の生徒が閉校式に演る韻誦や唱歌の練習をしてやる、其間には外國教師がクリスマスの買物をする隨行を仰せ付かる。忙がしいの何のツて一日起ち續けて日が暮れると疲勞して座睡が出て来る……本統に骨が折れて閉口しまつた、』と暖ためた手で頬を壓付け、『それでも閉校式が濟んでからお底で生徒が能く成功たツて外國教師が喜んで下すツたから……さう／＼お目に掛けやうと思ツて、』と憶出した様にお納戸繻珍の帶を搜つて七寶製の冠を箆めた黄金の十字架を時計の鎖から脱して、『好いでせう。ミセス、リンチから贈て呉れたノ——此夏、案内者になつて日光へ伴れてツて上げた波士頓の貴夫人……』

純之助は十字架を掌上に載せて其裏に毛彫で「神の榮光がミス中條靜江に恵を垂れ給ふ事を祈る」と英語で刻り付けたのを見、無言で微笑した。

『好いでせう。』と靜江は左も嬉しさうに嫣然して、『簡單で高尚で、案は大好き。クリスマスの晩に鳩が澤山飛んで來た夢を見たから、必と喜びの音信があると喜んでたら、其翌る日に届いて來た……眞實！ ヤコブやヨセフの夢は悉皆的中つて。』

純之助は故とらしく呵然と笑つた。靜江は片頬に微笑みつゝ、